

「豊かな言語活動」を意識した授業実践に関する考
察：「総合演習」の授業を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2012-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉崎, 哲子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006482

「豊かな言語活動」を意識した授業実践に関する考察

—「総合演習」の授業を通して—

A study on the practice by enforcing “Activity to attain linguistic proficiency”

— Through the “Consolidated Practice” —

杉 崎 哲 子

Satoko SUGIZAKI

（平成 23 年 10 月 6 日受理）

はじめに

小・中学校、高等学校にかぎらず、大学教育においても授業研究が重要であることは周知のことであり、筆者も授業実践に対する自己評価を随時行って改善を加えていくよう努めている。

殊に、この度改訂の小・中学校および高等学校学習指導要領においてあらゆる教科や学校生活での言語活動の充実が謳われている状況をふまえると、教員養成を主軸とする本学部の教育活動でも、このことを真摯に受け止めて授業実践に取り組む必要があると考える。

そこで本研究では、国語科教員数名が3・4時間ずつ分担する「総合演習」の自らの実践を通して、大学教育における豊かな言語活動を意識した授業実践について考察する。

1. 言語活動の充実について

学力の重要な要素について、① 基礎的・基本的な知識・技能の習得、② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③ 学習意欲であるということが示された（2007.6 学校教育法の一部改正公布 第30条第2項、第49条、第62条等）。

ところが、子どもたちの学力の現状については、「基礎的・基本的な知識・技能の習得については、一定の成果が認められるものの、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式の問題に課題がある。これらの力は現行学習指導要領が重視し、子どもたちが社会において必要とされる力であることから、大きな課題であると言わざるを得ない。（2008.1中央教育審議会答申 幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について）ⁱ」との指摘があり、これをふまえ、思考力・判断力・表現力等を確実に育むため、平成20年1月の中央教育審議会答申では、「各教科の指導の中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、観察・実験やレポートの作成、論述といったそれぞれの教科の知識・技能を活用する学習活動を充実させることを重視する必要がある。」と示している。さらに具体的な知識・技能の活用をさせるための学習例を挙げた上で、学習活動の基盤としての言語の役割に着目している。

言語の役割については、「知的活動、感性・情緒等、コミュニケーション能力の基盤として、生涯を通じて個人の自己形成にかかわるとともに、文化の継承や創造に寄与する役割を果たすもの」(2007 文部科学省、言語力育成協力者会議第8回配布資料「言語力の育成方策について(報告書案)」)とあり、言語の役割をふまえた上で、思考力・判断力・表現力等の効果的な育成のために国語科のみならず各教科等で言語に関する学習活動の充実を図ること、つまり、各校種の各教科等を横断して「言語活動の充実を図ること」の必要性が強調されている。

平成20年3月告示の小学校及び中学校学習指導要領と平成21年3月告示の高等学校学習指導要領では、「言語活動の充実を図ること」が各々の総則に明記されており、学習指導要領の各教科等の解説にも言語活動の充実を図ることを目的とした記述が見られる。

以上のような動向をふまえ、教員養成課程を有する本学部においても「言語活動の充実」を意識して教育活動に取り組む必要があると考える。

2. 「総合演習」について

(1) 科目の目標と書写・書道分野の位置づけ

・授業の目標

人類に共通する、または日本社会全体に関わる様々な課題に関する分析・検討する力、また、それらの課題について児童・生徒を指導する力を身につける。

・書写・書道分野の位置づけ

本授業は、科目の内容全体の後半段階に位置しているため、学生が「文化」についての意識を高めて授業に臨んでいるという前提のもとに進める。「書写・書道」の担当者として、与えられた4回の授業のなかで「『文字文化』として書き文字について考える」ことをねらいに定め、自主的な取り組みが期待できる体験的活動として、また、大学教育においても義務教育、高等学校教育と同様、豊かな言語活動としての展開を工夫する必要があると考えて「書く活動」を導入した。展開の際には、本授業の目標にあるように教員養成を意識し、中学校現場での実践に近い形態を採用する。

(2) 学生の実態

書文化の学生は1名を除き3名が、また国語科の学生は16名全員が教員免許の取得を希望しており、しかも、国語科の学生は1週間前まで附属校や協力校で授業を経験しているという現状をふまえて、本演習は「教育現場」での実践を視野に入れた模擬授業形式で展開する。

(3) 実践の流れ

〔実践の流れ〕

		指導内容	学生の活動
1	ガイダンス	①「書き文字」の例を挙げる ②本演習のねらいと4回の流れ、演習後の課題を説明	グループ作り、内容検討 展開の相談と準備
2	実践1 …名刺交換	相手を意識する以前に自分自身を見つめる 私らしさをどう伝えるか、考えて書く	名刺を作る 名刺交換をする
3	実践2 …メニューを作ろう	献立名を確認する(学食のメニュー) 店主になって、店の雰囲気を考えて書く	店の雰囲気を考える メニューを書く
4	実践3 …広告作り まとめ	商品名とキャッチコピーを確認する 購買意欲を高める効果的な広告を作る 演習後の課題を確認する	広告に書く内容を決める 効果的に書く 演習のねらいを確認する

3. 実践の内容と結果

第1時のガイダンスの最初に「書き文字」の例を答えさせたところ、まず「年賀状」や「暑中見舞い」の葉書、手紙というような個人的レベルの書き文字を、次に「賞状」「トロフィー」「応援旗」といった学校生活で目にする書き文字を挙げ、続いて「表札」「看板」などの社会生活での書き文字に注目していった。他に「命名」「目録」「石碑」なども挙げた。

受講生全体を3つに分けて書文化の学生を各グループに配し、模擬授業形式で「書く活動」をするという本演習の流れと演習後の課題を説明、各々のグループで扱う教材を相談させたところ、1グループは最初本の帯を作るという案だったが、本の選定が難しく広がり過ぎることを懸念し「名刺交換」に落ち着いた。2のグループが「料理のメニューを作る」、3のグループは「商品の広告を作る」という活動が候補に挙げた。2と3の内容は類似しているようだが相違点を明確にするとよいと判断し、学生の主体的な取組みを重視して決定した。

3-1. 実践1（名刺交換）

- ①名刺大の画用紙に「教育学部国語科」「氏名」「〇〇ゼミ」と書き、幾人かと名刺を交換する。
- ②交換した人に見た印象を書きこんでもらう。〔ワークシート〕…A
- ③自分について、どんな印象を持って欲しいのかを考えて再度名刺を作り、幾人かと交換する。
- ④交換した人に見た印象を書きこんでもらう。〔ワークシート〕…B
- ⑤意図したように伝わったかどうかについて、感想を書く。…C

〔ワークシート記入例〕

（個人名記載のため実物の掲載は不可）

- A) 文字の列が揃っていて、きっちりしている印象を受けた。
 B) 学部とゼミを細くし、名前を太くしたので、名前がパツと印象に残る。
 C) 字の太さや大きさを少し変えるだけで相手に与える印象がすごく変わるので驚いた。

ワークシートのA、B、Cを総合的に見て、その内容を分類し次に示した。

◎字形、線質に関して

- ・ 整齊な字なので几帳面な印象を受ける
- ・ 癖を減らしたら読みやすくなった
- ・ 丸みがあるので穏やかでかわいい印象
- ・ 角が強調されてカチツとしたイメージ
- ・ 創意工夫があるので自己主張ができる人だと思う
- ・ 丁寧な運筆で書いてあると誠実な感じがする

◎大小、細太に関して

- ・ 全体に小さくて控えめ、謙虚な印象
- ・ 大きくて存在感が出ている
- ・ 細くて大人しいが芯の通った印象
- ・ 太くて堂々と落ち着いた印象

◎筆記具の効果（3つの文字群の書き分け）

- ・ 筆ペンの字が見やすく優しい感じ
- ・ 細いペン書きの線がシンプルで明るい

◎配置、余白に関して

- ・ 天地左右を空けたら中の文字が目立ってよくなった
- ・ 全部を右に寄せるように書いていてインパクトが強い
- ・ 用紙の中央に寄せると人物全体が目立って見え、行動力が感じられる
- ・ ゼミと学科を寄せて書いたら名前が目立って効果的である

◎書式の違いに関して

- ・縦書きにしたら、国語科のイメージに合った
- ・縦の方が、左右払いや下方の漢字の広がり映える

◎書体の違い、書き分けに関して

- ・名前が行書なので繊細な感じが出た
- ・行書は古典的なゼミの特徴が出せる
- ・行書を取り入れたら女性的な印象になった
- ・楷書で几帳面な感じが出ている

一般的な小・中学校の硬筆書写の学習内容は、整齊な字形と紙面に対する大きさや配置、中心をそろえる等であるが、それらについての指摘を発展させ、自己アピールの手段である名刺の特質を生かし自分のパーソナリティを表現する「書きぶり」や「筆跡」という考え方とも絡めて考えさせる実践となった。

「色や文字以外のデザインに頼らずに『その人らしさ』を伝えられることができるのが手書き文字のよさである。」「文字に思いを込めることができ性格までも表すことができるので、今後の署名や芳名記帳に生かしたい。」等、授業後の感想にも、それが反映されており、「色々なフォントやローマ字、書の古典の書きぶりを提示するとよりよく展開できるのでは。」というように、教育現場での実践に対する意識も生まれていた。何よりも「私は国語科□□ゼミの○〇です。宜しくお願いします。」と明るく声を発してお辞儀し、楽しみながら手書きの名刺を交換し合う様子から、充実した言語活動として評価できる。自分がどういう人間で、周りにどう思われたいのかを考え、自分自身と向き合い自分を見直す機会になったという点においても有意義な活動であった。

3-2. 実践2（メニューを作ろう）

このグループは、〔活動のねらい〕を「自分なりの意図をもって文字や紙面構成を工夫し、文字の持つ影響力を感じる」ことにし、学生に馴染みの学食の献立名を提示してメニューを作る活動を展開した。食卓に立てて使う設定で八つ切画用紙を三角に折り色も加えてよいことにしたので、担当の学生は、絵や図に拘りすぎないよう声かけしながら、様々な筆記具を効果的に使って書くことを指示していた。



【メニューとワークシート例】

メニューの裏面に「店主の名前」として制作者の名前を書くよう伝えたところ一気に活発さが増した。自分の店はどんな雰囲気なのか、そこで料理を提供する場合どのような器に盛



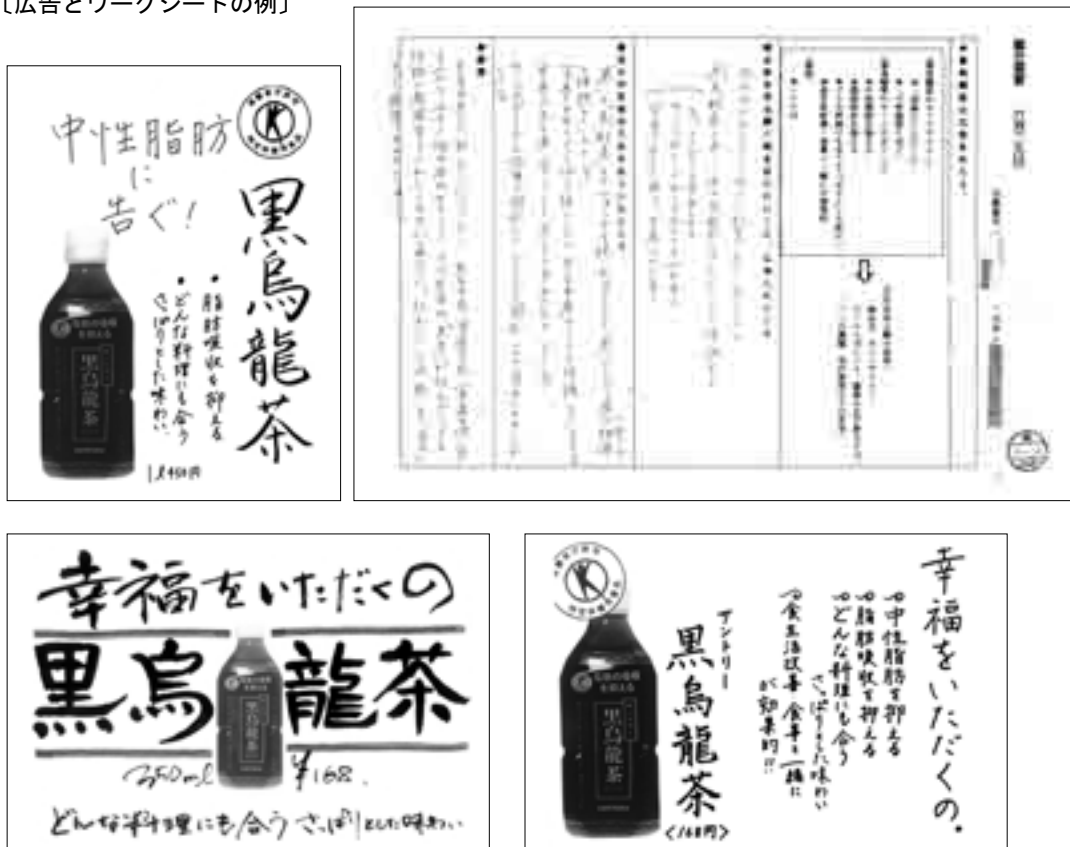
り付けて出すのか等、自由にイメージを膨らませることを意図して「店名」を考えさせたことも「店のイメージ」をはっきりさせて作り上げるうえで効果的だった。また、複数の料理名を並べているのに全体として統一感があるということを重視し、書体や個々の字形・線質の工夫による書きぶりだけでなく、配置や大きさ、色使い等も意識して作り上げる姿も見られた。

各自の創意工夫が活き、お洒落なイタリアンレストランを思わせるメニューもあれば、素材感あふれる海の家風のメニュー、学園祭の模擬店を感じさせるようなメニューもあった。実際には存在しないのに、その料理自体はもとより、器やテーブルコーディネート、店構えまでも想像することができることに感動したという声が多く、どの店も存在してほしいと思わせる程、実に楽しい活動になった。

3-3. 実践3（広告作り）

「『黒烏龍茶』の広告を作ろう」では、ワークシートとペットボトル商品画像のカラーコピーの用紙を配布して、A4サイズの下紙に広告を作成する活動を行った。

〔広告とワークシートの例〕



この活動では、文字と写真とのバランスを考えながら文字がごちゃごちゃしないよう、大きさや太さ、書きぶりや配置を工夫していた。商品の印象やセールスポイント等、伝えたいことがうまく伝わるようにするためには、情報量の制限が重要になる。イメージを独自に膨らませていった実践2と比較すると、想像力拡大の程度に差はあろうが、さらに商品のイメージを強調しようとする姿勢も見られ、文字文化の一つとして日常生活の中に溢れている広告を見直すきっかけになったのではないだろうか。ただ、商品ラベルの文字との関連性を大事にしたためか、活字風にデザインした文字が多く見られたことに関して、「書き文字」の良さを生かせな

かったと感想を述べている者もいた。

商品ラベルに手書き文字を採用しているものも多く見られるので、活字によるラベルとの比較を取り入れた展開も可能であると思われる。

3-4. 提出課題…「文字文化として『書き文字』を考える」

課題に対する自分の考えを、単にレポート用紙に書くのではなく、例えば手紙、あるいは作家になりきってなど、書き文字であることの意味を意識して書くよう指示したところ、縦書きの便箋に書いて提出した者が8名、横書きの便箋に書いた者は2名（うち1名はAIR MAIL）、原稿用紙に書いた者が4名であった。そのうちの1名は、漢字カタカナ交じり文で「雨ニモ負ケズ」を意識して書いていた。他に、絵日記のように書いたもの、寄せ書き風に書いたもの、漢字仮名交じり書の作品風に仕上げたもの、賞状に書いたもの、単行本仕上げのものもあった。〔書かれた内容の主なもの〕

- ・視覚に訴える画像やデザイン性の高いものがたくさん溢れているが、物事の本質を伝えられるものが文字であり、それを確実にしかも簡単に伝えられるのは書き文字ではないだろうか。
- ・これまで、文字は情報を伝えるというツールとしか考えていなかったが、それにとどまらず、芸術性や人の思い・気持ちの表現など、生活のあらゆる場面で重要な働きをしていると感じた。
- ・工夫をとらえると書き手の意図や考えを明らかにすることができる。
- ・文字の形や大きさ、太さ、配置で印象を変えていくことを実感した名刺、文字で雰囲気を出すことに加え、色を付けることによって文字の雰囲気を引き延ばしたメニュー、さらに写真を使って紙面をより華やかな印象にさせた広告というように、3回の授業が徐々に文字以外の所に派生していく形になった。
- ・活字の文字には現在たくさんの種類があるが、それは書き文字の様々なバリエーションから感じた様々な印象をもとにできたのだと思う。場合によって、使い分けたい。
- ・「書き文字」は、その人、その瞬間でしか作れない、世界に一つだけしかないことが魅力だ。
- ・自分の文字に無頓着で何気なく使っていたが、人に与える印象を意識して書きたいと思った。
- ・小学校と中学校とでは教科書の活字を変えている。この例からも「どう伝えたいか」だけでなく、「誰がこの文字を見るか」によって、文字の形式は変化していったのではないと思う。
- ・文字の表現方法と印象についてしか考察できなかったが、今後はもっと深く広く考えたい。

全体に、書かれた文字自体をとらえて「書き文字」の魅力についてはまとめていたが、文字を使う目的や書くことの意味については、「気づき」はみられても深い考察は見られなかった。当然ながら、「文字文化」についての考えをまとめるまでにも至っていない。

〔提出課題の一部〕



[illegible]

ここで分かる通り、取り組みたい活動は、全体では「名刺交換」が多い。3年生は現実を考え、履歴書や願書を書く活動を望んでいる。それぞれ取り組みたい理由に「生活の役に立つ」が挙げられているのは硬筆学習のねらいとしているところであるが、それ以外に「自分らしさを出せる」「様々な工夫ができる」などを重視していることが分かる。

中学生は自分自身の内面に対する意識が芽生え、他者との比較や他者からの自分に関するフィードバックも合わせて自分自身の状態を把握する^{iv}。この時期に「名刺交換」で自分を見つめ、「自分らしさとは何か」という問いに向き合いながら友人に働きかけるという活動が一番望まれていることは当然であり、自分らしい創意工夫が可能な学習への期待もうなずける。

その後大学生になると、より広い社会という枠組みから、自分の立ち位置について考えるようになって、自分らしさを生かした生き方、アイデンティティーを模索していく^v。したがって、この度の活動は、昨今の大学教育に求められているキャリアデザインとも密接に結びついているということができよう。自分自身の大学での学びの体験を肯定的に語れるような活動の蓄積が求められている。

このように発達段階に応じて「書くこと」の意識化を進めていくと、「書く」活動は、読んだり、話したり、聞いたりすること、さらに体を使ったコミュニケーションをも含めた「豊かな言語活動」の軸になり得るのではないだろうか。特に実践1では「自分を見つめる」ことへの深化、実践2と3では創意工夫が可能で他への発信の明確化が、「豊かな言語活動としての書くこと」によってもたらされたものと考ええる。

4.2. 「文字文化」と「書き文字」について

中学校国語科の学習指導要領における改訂の趣旨には「言語活動の充実」とともに「伝統的な言語文化に関する指導の重視」が挙げられており、「改善の具体事項」には「書写の指導については、社会生活に役立つことを引き続き重視するとともに、文字文化に親しむようにするため、内容や指導の在り方の改善を図る。」と示されている。「言語文化」ではなく、「書写」の項に「文字文化」という語を使っているのは、「書き文字」への意識を明確にする意図からであると考えられる。

文字は道具であり、手で書こうが印刷しようがその本質は変わらない。「ここで問題にすべきは書くという行為であり、書くことの背景にある思想であり、その思考への意識化であり、書くことによって生産される思想なのである。^{vi}」という書くことの本質に立ち返り、「豊かな言語活動」の意識を基盤にしたうえで『“手で”書く』活動にする必要があると考える。

豊口が『「文字を書くこと」は真の目的ではなく、『文字を使う目的が達成されること』が目指されねばならないのではないかと述べている通り、小・中学校、そして教員養成の大学教育における書写教育は、「文字」のみを見つめるのではなく、その際のコミュニケーション、つまりは豊かな言語活動で展開される行動の全体をとらえることが重要になってくる。

榎本(1999)は、「自己は、こうありたい自己やあらねばならない自己に導かれて、望ましい姿の実現に向けて形成されている」が、「その場合の望ましいというのは、自分にとって重要な他者にとって望ましいという意味」であって、「その他者がこちらに求めてくる理想自己や義務自己は、それぞれの他者が自己の拠り所としている価値観によって方向づけられたものであり、文化的に規定されたものである。そのような意味において、たとえ複数の価値に引き裂かれることがあっても、人は文化的につくられるのである。」と述べている。さらに「ここ

で重要なのは、文化的価値は主として言語的に、物語という形で保持されており、物語をとおしてその文化内の個人の中に実現されるということである。」と続けている^{vii}。この部分から、言語活動の中の、特に「書くこと」と「文化」との結びつきを確かにとらえることができる。

上述の通り今回取り扱った「総合演習」の目的は十分に達成されたと考えられる。

4.3. 「書き文字」と教育について

小林（1990）は、「文化」を広義にとらえ、レジャーや衣食住といった日常の「生活文化」や社会運動や革命運動という「政治文化」などの現象、つまり近代社会における文化統合の諸問題を史的に考察し、次のように述べている^{viii}。

…「祭典のユートピア」（＝フランス革命期の十年間について、B.バチコ（B.Baczko）の名づけた「祭典のユートピア」／筆者注）は「あらゆる年齢の人びと、あらゆる身分の人びと、またさまざまな生活環境にある人びと」を対象として、社会全体が教育の場となることをめざしていく。そして、「教育の目標とは、あらゆる年齢において人間を完成すること」であり、〈祭典〉のようなスペクタクルをもってすれば、人びとの内面世界を変革することは、人間の障害にわたる無限の発達可能性に向けての教育をあらゆる機会、あらゆる場所で可能にするという啓蒙の光の側面を持っている。しかしながら、その陰では、人びとの内面の新庄、感性までも含めた、生のあらゆる領域でのきめこまやかな教化・統制・監視が国家によってめざされていたのである。…

時代や国家の違いこそあれ、この論が、文化と称されるものと教育との関連性や、統制を意図した規範意識の発生を示唆していることは明確である。そこで、「基礎的な、一国の文化の基準を植えつけるという重大な機能を発揮する」ことと「文明や文化の活力は、先人の残したものを継承し、やがてそこから抜け出していくことによって発揮される」こと、また「基本的な型やかたちを、まず身につけて、こんどはそこからどれだけ抜けだして新しいものを創出できるか、そこに文化の創造力というものは問われる。^{ix}」という教育の役割を自覚する必要がある。「書き文字」を意識して言語活動の充実を目指す指導者は、これをふまえて自らの姿勢を引き締めていくことを要求される。

この際、「書く」行為の主体である「人間」に注目すると、「筆跡」というとらえも参考になる。筆跡とは文字どおり筆のあと（＝跡・蹟・迹）、書かれた文字のことで、文字の書き振りをいう。書き振りとは、書かれた文字の書体、風つきあるいは書かれ様ともいい、昔から、ある人間の、場合によってはある階級や社会、ある時代の生き方の好みやくせ、独特のスタイルがその人の生活や生きかた、また階級・社会・時代に一貫してみとめられるときに使ってきたことばである。筆跡も同様に、書き手がそれを意識している、いないにかかわらず、書かれた文字に、独特のくせや好み、型や様式の特徴が表れている。

これに関して、「筆跡を問題にする場合、書き手を抜きにして論じられないし、逆にまた、ことほどさように筆跡には書き手の人柄や人間性が、ごまかしようもなくあらわれ出る、ということである。つまり、筆跡論は当然のこととして、人間的側面をもたざるをえないだろう。」と述べた原（1997）は、以下のように続けている。「もし筆跡の美醜が、そうした書き手の人間性をはなれて論じられたとすれば、単なる技術論になってしまうだろう。…（中略）…だからといって書き手の人間性だけで筆跡が論じられるものでもあるまい^x。」

したがって、「書き文字」には、書き手の「書く」という行為や「書く」ことの背景にある思想、その思考への意識化が込められているということを再認識し、子ども達の「自己肯定感」を大切にするという視点が求められる。

4.4. 課題と今後の展開

「文字文化として書き文字を考える」ことをテーマに実施した今回の実践は、日常に生きる「楽しく豊かな言語活動」という点では先に考察したとおり有意性が認められた。ただし最終の提出課題については、表現の工夫は見られたものの、その内容が考察に行きついていなかったことから、4回の授業での取り組みの限界が指摘できる。

そこで、国語科の3年生が全員履修する「学校教育教員養成課程」の専門科目の「国語科教科内容指導論Ⅱ」（複数教員で担当、書写分野は3回）において、この成果をふまえた新たな教材開発の展開を考えた。国語科の授業「短歌」「随筆」などからの発展が多い中、「学級目標の横断幕をつくろう」「メッセージカードでありがとうの気持ちを」という活動を考えたものも見られ、「書くこと」について熟考させることができた。また、小中の系統性についても考えさせた。授業を縦横に関連させることの意義は大きいと感じている。

今後、これらを小・中学校あるいは高等学校での実践化へと発展させることは十分可能であり、模擬授業の経験が生きることを期待している。ただ、発達段階への対応という点で、特に小・中学生に関しては、その反応が自分達と同じではないことを認識すべきであろう。

おわりに

今回、自らの授業実践を自己評価し、「豊かな言語活動」としての「書く」活動について問い直すことができたことは実に有意義であった。「書写・書道」の技能習得という特質から全面的な導入は難しいが、教員の資質養成を自覚し、可能な限り言語活動の充実を意識して実践したいと考えている。担当授業全てにおいてカリキュラムの系統性を明確にし、各々の授業展開を検討するとともに、継続的に授業研究を続けていく必要性を実感している。

ⁱ 国立教育政策研究所の教育課程実施状況調査や全国学力・学習状況調査、国際的調査であるOECDのPIISA調査、IEAのTIMSS調査などの結果分析をもとにとらえている。

ⁱⁱ 「『書く』ことに関する基礎研究」豊口和士『書写書道教育研究』第19号全国大学書写書道教育研究 2004

ⁱⁱⁱ 「発達段階に対応した硬筆指導の方向性についての考察」杉崎哲子『全国大学書写書道教育学会第26回茨城大会研究発表要旨集』、平成23年9月、pp. 28～30

^{iv} 『発達心理学』榎本博明編著 2010 おうふう

^v 上掲書iv

^{vi} 上掲書ii

^{vii} 「自己指針は文化的に与えられている」榎本博明『＜私＞の心理学的探求 物語としての自己の視点から』有斐閣 1999

^{viii} 「〈POLICE〉としての〈公教育〉-〈祭典〉のユートピアと〈学校〉のユートピア」小林亜子 199 - 240『規範としての文化 - 文化統合の近代史 - 』谷川稔 原田一美他 平凡社1990

^{ix} 『筆跡の文化史』原子朗 講談社 1997

^x 上掲書ix